

# 対話を通して問題意識を明確にしていく場

実践研究「総合活動型日本語教育」から

六笠恵美子

## はじめに

私は、2004年度秋学期に「日本語教育実践研究(9)」(以下、実践(9))を履修し、総合活動型日本語教育の方法を体験的に学んだ。この実践(9)を履修する大学院生は、早稲田大学日本語教育センター別科日本語専修過程(以下、別科)の留学生の日本語クラス「総合3-6」(以下、「総合」)に実習生として参加し、留学生の活動をサポートするかたわら、「私にとって総合活動型日本語教育とは何か」というテーマでレポートを執筆する。

この実践研究レポートは、テーマについての「動機」、動機をもとに行う他者との「対話」、対話を経て導き出された「結論」の順に書いていく。また別科の「総合」クラスを受講する留学生も、これと同じ手順、方法で「私にとって～は○○である」というレポートを書いていく。「総合」クラスでは、自分の書いたレポートについて仲間や実習生と意見交換をする。また、BBS(電子掲示板)を使って意見交換、質問などがいつでもできるような環境におかれ、実習生は随時、助言を行うなどサポートをしていく。

私は、「総合」の理念を学ぶとともに、「総合」クラスに実習生として参加した体験、そして「実践(9)」で一緒に学んだ院生とのディスカッション、自分の書いた「動機」をもとに対話の相手になっていただいた方との「対話」を通して、様々な刺激を受けながら、自分が目指す総合活動型日本語教育とは何かを探し求めた。

## 1. 動機

私は、これまで国内の予備教育機関で日本語を教えてきた。日本語教師になってしばらくの間は、「明日、何をどう教えればいいのか」ということで精一杯だったが、教えることに多少慣れてくると、自分の教える技術はどの程度のものなのか、他の

日本語教師は、どのような工夫をして教室活動を行っているのか、ということが気になりはじめた。そんな頃に、偶然、留学生と院生のレポートを一冊の本にまとめた『眠れない25人の「私」と熱い日本語, YEAH! - Best of 総合 2001 秋-』を読み、早稲田大学の別科に「総合」という授業があることを知った。

そのレポート集をばらばらとめくって、まず驚いたことは、「ディスカッション」という章立てがあることだった。そして、一人一人の書くスタイルや内容がとても個性的でおもしろく、エッセイ集を読むような感覚で、楽しく読み終えた記憶がある。教師は、「日本語学習者（以下、学習者）が書いた短文や作文を見て、文型や表現を正しく使っているか、日本語として自然かどうかを確認し、正しい表現、より自然な表現に訂正して返却しなければならないもの」であると考え、添削は大変な仕事だと思っていた。しかし、書くという行為は本来、「自分を表現する」ことであり、「相手に自分の言いたいことを伝える」ことである。そのレポート集に掲載されていたいくつかのレポートには、読者である私の心に響くメッセージがあった。

しかし、そのレポート集を読んだ時のある種の興奮はすぐにさめてしまった。当時の勤務校は、一人でも多くの学生を進学させようという受験対策重視の学校だったため、「自分たちの言いたいことを表現しよう」という活動は、なじまないのではないかと考えたからである。だから、すぐに「総合」を実践しようとは思わなかった。その代わりに、「自分の言いたいことを表現するってどういうことだろう」、「そうした教室活動を行う場合の教師の役割とは何だろう」と自分に問いかけた。つまり、「教える」ということに疑問を持つようになったのである。学習者はその場では答えがみつからなくても、後で気づくのかもしれない。また、他者から意見や感想をもらうことで、考えが変わるのかもしれない。教師の役割は、学習者が持っているものを引き出すことであり、そのためには、表現するためのプロセスをもっと大切にしなければならないのではないかと考えるようになった。

この動機文を書くにあたって、自分にとって理想とする日本語教育とは何かと考えた。学習者は一人一人違うのだということを認め、学習者が言いたいことを表現するためのプロセスに着目した教室活動を行いたいと考えている。「総合」に惹かれた理由は、自分の言いたいことを表現しよう、相手の言ったことを取り入れようというコンセプトのもとで行われる表現活動であり、レポートを書くプロセスを大切に活動だからである。私にとって総合活動型日本語教育とは、学習者が他者との対話を通して言いたいことをみつけるひとつのプロセスである。

## 2. 対話

### 2.1. 対話の相手

対話の相手は、日本語研究教育センターの客員講師で、「総合」の授業も担当していたMさんをお願いした。Mさんに対話を依頼した理由は、総合活動型日本語教育の実践者であること、そして「リテラシーズ」研究会での研究発表<sup>1)</sup>を聞き、「対話」に強いこだわりを持っている方だと思ったからである。自分の問題意識は「対話」「プロセス」がキーワードだと思ったので、ぜひMさんに対話をしたいと考え、11月初めにこのレポートの「動機」<sup>2)</sup>をE-mailに添付して、Mさんに対話の依頼をした。

対話が実現したのは、「動機」を書き終えてちょうど1ヶ月が過ぎた頃だった。「総合」クラスはすでにコースの後半<sup>3)</sup>に入っていて、私が担当するグループの学習者はそれぞれの対話を終え、「対話」部分の執筆を始めていた時期である。1ヶ月前にMさんに対話を依頼した時、私はグループの学習者に、うまく問いかけることができなと感じ、それが自分にとっての問題点だと考えていた。しかし、対話が実現した頃は、「動機」を書いた時とは違う「もやもや」を感じていたように思う。そして、それが何なのかさえ自分自身つかめていなかったのかもしれない。1時間くらいの予定で始めた対話は、結局3時間あまり続いた。

日時：2004年12月2日16:30~19:30

場所：早稲田大学22号館

以下に、実際の「対話」を文字化した部分<sup>4)</sup>を引用し、「対話」を通して考えたことを述べていく。Mが対話相手、Eが筆者である。

### 2.2. 「対話」とは何か

Mさんとの対話は、私が書いた「動機」の内容確認から始まった。Mさんの方から紙面に収まりきらなかったエピソードについても話してほしいと言われ、私は自分が書いた「動機」について、きちんと説明する準備をしてこなかったことを後悔

---

1) 2004年10月2日早稲田大学において「リテラシーズ」研究会の第一回研究発表会が開かれ、Mさんは「対話教育としての日本語教育についての考察-〈声〉を發し、響き合わせるために-」というテーマで発表した。この発表では、ミハエル・バフチン、パウロ・フレイレらの〈対話〉についての論考と照らし合わせながら、総合活動型日本語教育の実践を分析・考察している。

2) このレポートを仕上げる際、動機文を一部修正したため、Mさんに送った「動機」とは若干異なるが、「私にとって総合活動型日本語教育とは何か」についての主旨は変更していない。

3) 2004年度秋学期の「総合」は、15週の日程で行われた。

4) 音声データの文字化については、対話相手と内容を確認した上で、筆者が表記上の調整を行った。

した。まとまりなく、だらだらと話す間、Mさんは「なるほどね」と相づちを打ったり、「うん、うん」とうなずきながら聴き役に徹していた。そして、話が一段落すると、Mさんは「あなたにとって「対話」とは何ですか」という問いを投げかけてきた。この質問によって、それまで自分があたりまえのように使っていた「対話」という言葉について、実はその意味をきちんと捉えていなかったことに気づかされることになる。

M: それで結局、総合活動型日本語教育っていうことがテーマになっている中で、とくに自分の問題意識と響くところはあれですよね、プロセスを大切にしている部分…

E: そうですね、何度も書き直すということ、あと対話をする。

M: 対話をする。六笠さんとして定義をするとそこでの「対話」って何ですか？

E: 対話ですか、それは、グループでの対話を今、イメージしていたんですけど、つまり書いたものに対してそれを読んだメンバーがコメントするとか、質問する、あと感想を述べる、そういうことを通して、また考えて次、直してやるっていう対話。

M: そこでの対話は、書きながら周りからコメントをもらったりして、動機が掘り起こされたり、書きたいことが掘り起こされたりというプロセスとしての対話ですよ。で、今、これ「対話レポート」といって、私と対話していませんか、その「対話」って何だと思います？

E: あ、それはあんまり考えていませんでしたが、それは自分が選んだ対話者なので、やっぱりその自分が選んだテーマをある程度相手が理解するという前提で対話しているので、そうですね、教室での私たちのグループでの対話と違って、うーん、こう、なんか真剣な話し合い…

M: 真剣な話し合い（笑）みたいな。仲間と、何でしょうね、内輪と外輪って感じですか？

E: うーん、私にとっては、あの、インタビューというイメージが強いんですが…

M: うん、うん、うん、そうですね。

E: 外で他の人に会って話をするというのは、私にとってはどちらかというとインタビューで、教室でみんなで話しているのは、ディスカッションという感じですね。私の言葉だと、教室の中の話し合いはディスカッションで、外のはインタビュー。そうすると、外のほうが「対話」になるのかな？

「対話とは何か」という基本的な問いを投げかけられ、私はそのことについて深く考えたこともなかったので、まず自分の頭のなかを整理する必要があった。そこでひとまず、教室での話し合いを「ディスカッション」、教室外で対話者と話すことを「インタビュー」という名前に置き替えてみた。「対話」についての定義をなんとか言葉にしようとするが、この時点ではうまくいっていない。私にとって「対話」という言葉から連想するイメージは、「二人の人間が向かい合って話をする」ことだったため、よけい混乱したのだろう。しかし、Mさんはそのことにはあまり突っ込まず、今度は「ディスカッションとインタビュー、それぞれの活動の目的は何ですか」という新たな問いを投げかけてきた。

### 2.3. 対話をすることの意味

M: まあ、「対話」という言葉をあえてどけて考えると、インタビューとディスカッション、種類が違いますよね。目的は何ですか。ディスカッションのほうは、自分の書きたいことを掘り起こしていってもらって、お互いに、相互的に意見をもらって掘り起こしてもらっていくのが目的かな？

E: そうですね、ディスカッションのほうは、読み手、読者がどう感じるのか、誤解がないか、本当に自分の表現したいことを書き、それが伝わっているか確認する場でもあるし、ただそれだけじゃなくて率直な感想もある。私はちょっとこれは興味はないとか、私はこのことに興味があるとか。で、私は読者がいる場合、あんまりみんなが関心を持たないようだったら、やっぱり書くほうとしてはどうやって書いたらみんなに関心をもってもらえるのか、テーマが悪いというよりは書き方が悪い。そういうことも含めて考えるのかな、と。

M: 読み手として受け止めてもらうということですね。

E: そうですね。それでインタビューのほうは、読者というよりは、自分の考えを率直に話す。その人はとくに自分が選んだ人だから、その人はどういうふうに感じるのかとか、考えるのかということが知りたいし、教室でのディスカッションとは質が違うものだと思います。

M: どういうふうに質が違います？

E: インタビューのほうが、自分の考えが変わるかもしれない。また、相手もそれに同意してくれたら自分の考えがさらに強まる。強まったり弱まったりする。

前述のようにMさんは私に対して「対話とは何か」「対話の目的は何か」という二つの問いを続けて投げかけた。それは、Mさんの言葉で言うと、相手の言いたいことを「掘り起こす」という意図があったのだろう。私は「動機」の中で、学習者が自分自身の問題（テーマ）と向き合い、言いたいことをみつけること、そのために、他者との「対話」が必要だと書いていたが、「対話」という言葉の意味をよく考えずに使っていたわけである。自分で書いた内容であったにもかかわらず、私は「対話」の定義についてうまく説明できなかった。そればかりか、「対話」という言葉が具体的に何を指しているのかということも混乱していた。私はMさんと話しながら、次のように「対話」について考えてみた。前述の対話の中で区別した「インタビュー」「ディスカッション」は、どちらも「対話」である。相手に質問したり、自分の意見を述べたりして、それに対して相手が答えたり、反応したりすることが「対話」である。対話とは、自分と他者との間で言葉が行ったり来たりすること。対話とはだれかと話すこと。整理するために区別した「インタビュー」のほうは、自分が問いをぶつけたい相手との対話であり、「ディスカッション」は、自分の問題意識について意見交換するための、グループの対話である。「対話」の定義が整理できさえすれば、あえてインタビュー、ディスカッションという言葉を使う必要はない。

一方、対話の最中に、「対話をすることで、自分の考えが変わるかもしれない」「自分の考えがさらに強まったり、弱まったりする」という答えを絞り出したことは、自分が想像していた以上に「対話」の重みを実感することにもなった。しかし、この時点では、「対話とは他者で行う行為だ」という固定観念にまだ縛られている。

#### 2.4. 実習生の立場から見た「総合」

「総合」クラスに参加する実習生という自分の立場については、「学習者を支援する者」と捉えていた。授業担当者からは、学習者に「問いかけなさい」という指示があったが、私はなかなか問いかけることができなかった。というのも、学習者が私たち実習生を教師役に見ていると感じたからである。学習者のなかには、「○○さん」と名前で呼ぶ者もいれば、「先生」と呼ぶ者もいた。「私は先生じゃなくて、実習生です」と主張することもできたと思うが、それで呼び方が変わっても、教師役として見ることに変わりないだろうと考え、「先生」と呼ばれることについてはとくに何も言わなかった。ただし、自分が「支援者」の一人であり、教えるのではなく支援をするのだという意識は強く持ち続けていた。しかし、すでにコースの後半に入ったというのに「どう問いかければいいのか」ということがわからず、も

やもやしていた。この「ももや」こそ、私がMさんにつけてみたい問いのひとつであった。

E: 細川先生はどんどん「問いかけなさい」と言うけれど、留学生は、私たち実習生のことを先生と思っているようで、そこで、私は遠慮してしまう部分があるんです。あまり言い過ぎると、何か求められているものがあるのかって思われるような気がして、どこまで言っているのかわかって引かかる部分がある。だから、私は見ている部分があるんですけど、学習者がどう考えているか、私にはよくわからない。

M: いろんなやり方があるって、まず「問いかけなさい」というのは、形上、問いかけることもあるけど、何を言いたいのか聞き出ささいということだと思う。強く問いかけられたことに対して自分の考えたい方向と違う時に、学習者が強ければ、「そうじゃない」って言えるけれど、強くないと、「そうかな、そうかな」になってしまうかもしれないし。

E: 学習者から相談という形で持ちかけられて、こちらが答えるというのを私は理想としてるんです。だから、このへんがひっかかるし、違うかなと思う。

M: それ共感します。ここでのディスカッションというか、意見交換のところでは、言いたいことを掘りおこすために明示的に問いかける場合もあれば、姿勢として待っている、聴き手として待っていて、相手に言っていてもらって、ただ単に聴くことによって、答えながら言いたいことが明確になっていくこともあるから。で、ある種、それを待つというの「対話」の一部ですよ。だから、強く問いかけて相手を追い詰めるより、相談という形でもちかけてもらいたいというのは、私は共感しますけどね。

学習者に対して「どう問いかけるべきなのか」という問いをMさんにつけたつもりだったのだが、実は、ここで初めて「対話とは何か」のヒントを得ることになる。つまりMさんの「聴き手として待つことも対話の一部だ」という言葉が、それまで持っていた「対話」のイメージを崩し始めたのである。

この後、私は実習生の立場から見た「総合」について、できるだけ具体的な事例を挙げながら語り、Mさんはそれを聴いてくれた。かなり長い時間話していることが少し気になったが、この日の二人の対話がどのように終わるのか検討もつかなかった。話しながら意識していたことは、できるだけ誤解のないように、自分が見た出来事や感じたこと、考えたことを対話相手に伝えようと努力することだった。そのため、まとまりなく話してしまったり、言葉につまったりもしたが、対話

相手が真剣に聴いてくれているので、適当に終わらせることはできなかった。そして、話の区切りのところで、Mさんは私が語った「もやもや」について次のように確認した。

M: 今のもやもやは、総合活動型日本語教育でプロセスを大事にする一、そして、学生同士でやりとりをしながら、掘り下げていくということは、共感するけれど、そのやり方として、とにかく問いかけ続けなさいと、問う人と問われる人の関係が固定化されてしまって、それでいいのだろうか？というのがもやもやですね。

E: はい、そうです。

この時、Mさんは自分の言いたかったことを理解し、受け止めてくれたのだと思った。そして、私が長々と話したことを簡潔にまとめてくれたので、本当にきちんと聴いてくれていたのだということを実感した。今、Mさんとの対話を振り返ってみて、相手の話を「聴く」ということがいかに大切なことがわかる。相手の話を「聴きたい」という聴き手の姿勢が、相手の言いたいことを引き出すことにつながるのだと思った。「聴き手として待つことも対話の一部だ」ということを私はこうして体験的に学んだのである。

私は「動機」の中で、総合活動型日本語教育とは、学習者が他者との対話を通して言いたいことをみつけるひとつのプロセスだと書いた。しかし、対話を通して「みつける」のではなく、もともと自分の中に持っている、もやもやとした問題意識を明確にしていくプロセスではないだろうか、そのために対話をするのではないだろうかと考え始めた。

### 3. 聞きたい「問い」

私はMさんに担当グループにおける実習生と学習者の関係、そして一つのグループに複数の実習生が入ることの意味、実習生同士の関係が、自分にはよくわからないと話した。授業担当者からは「問いかけなさい」と指示されただけで、グループにおける自分の役割というものをはっきりとしていなかったからである。学習者にとってよき支援者になりたいという思いはあったが、具体的なその方法がわからず、迷いながら学習者をサポートしていることに不安を感じていたのである。

M: じゃあ、今、聞きたい問いは何ですか？ふふふ（笑）

E: 聞きたい問い？

M: ここまでは六笠さんの主張ですよ。

E: この活動に関して、聞きたいこと？

M: つまり、対話するじゃないですか。私を対話者として選んでくれて話したいと思ったのは、どういうことだったか？改めていうと。

E: 私が聞きたいと思ったのは、関係性。

M: 関係性…。

E: 関係性をどういうふうに感じていらっしゃるのか。

M: 今、六笠さんが参加している「総合」の場合はある種、司会者がまだいないんですよ。六笠さんともう一人の実習生のどっちかがやるべきなのか、それともまったく決めないで自然発生的にうまくいくようにするのか、それも二つのチョイスがあると思うんですよ。

E: だから、私がなぜこんなにもやもやしたかという、実習生の役割分担をはっきり決めないまま、意識しないまま「総合」クラスに入って、それで、私はちょっと様子を見ていたっていうふうになってしまったから。活動に入る前に、役割を決めないんだったら決めないでいいとは思いますが、役割を決めるのか決めないのかという、そのへんの話し合いがないまま入ってしまったこと、そういうことを…

M: 聞きたいと（笑）。それだったら、私なりの答えとしては、私は影の進行役は必要だと思うんですよ。最終的には進行役がいなくても進むようになるのが一番いいんだけど、ただ、ばーんと放置して必ずしもうまくいかない時に、そこでやっぱり口火というか、仕掛ける人が必要。あるいは二つやり方があって、もうこの人は「進行役ですよ」と決めて、役割分担があって、初めにリーダーが口火を切っているうちに、勝手に動いていくようになったという形にする方法もあれば、あえて明示的なリーダーを決めないんだけど、なんとなく一応役割分担として決めて、うまくいくように仕掛けるというやり方もあるかもしれない。いずれにしてもここの中で了承とかある種の作戦とかが、あったほうがやりやすいでしょうね。

E: 私はそのほうがやりやすかった。で、だからホントにこう、ちょっと、最初の頃、何をどうしたいのかなという面が私には見えてなかったから、なんか戸惑いながら参加してるから楽しめないし。でも、先週くらいから私も慣れてきて、こうすればいいのかなっていうものが自分なりに見えてきました。遅いんですけど慣れるのが…

M: そういうものですよ。

E: いいのかもしれない、結果としては、そういうふうには投げられて「何だろう、何だろう」と思いながら探って、自分で「こんなことかなあ」って見えてきたってというのは、結果としてはよかったのかもしれないんだけど、最初の頃はそのへんが不満で…

M: 不満っていうか戸惑いっていうか、もやもやだったんですね。わかりやすいですね。その問いに対する私の答えは、うん、やっぱりだれかいたほうがいい。それを明示的にするか暗示的にするかは別として、そういう役割の人がどっかにいると、うまくいくと思う。

E: どちらでもいってことですね。

M: そうですね、どちらでもありうるってことかな。

「総合」には、こうすればうまくいくという方法は存在しない。だから、手探りで学習者をサポートしていかなければならない。そのことは自分でも十分理解しているつもりだった。しかし、何をどうすればいいのかわからないまま「総合」クラスに参加していた数週間、私は自分の役割を見失いそうだった。こうした活動に慣れていないということもその一因だっただろう。Mさんとの対話を通して、自分が支援者として何をすべきなのか、自らの役割を客観的に捉えることができたことは、対話をしたことの大きな収穫となった。

#### 4 結論 — 見つけた答え

私は、コースの前半は前述のとおり「総合」の活動を見ていることが多く、グループの学習者に深く関わろうとしていなかった。教師役ではないのだから、あまり強く問いをぶつけないほうがいいのではないかと考えていたのである。もちろん、何も問いかけなかったわけではない。学習者のレポートを読んで、意味が曖昧なところについては「これはどういう意味ですか？」と聞いて確認した。

しかし、コース後半に入ってから「もっと問いかけるべきだったのではないか？」というジレンマに陥っていた。きっかけは、学習者Nさんのレポートの「対話」を読んだ時の印象である。Nさんはテーマを自分の問題としてきちんと捉えている人で、レポートの「動機」を読む限り、問題点はみつからなかった。しかし、Nさんがまとめた「対話」を読んだ時、「相手にぶつきたい問いは、何だったのか？」ということが私には全く伝わってこなかったのである。グループの対話では誰もそ

の点を問題にしなかったし、とくに間違っただけを書いているわけでもない。それで、つい質問を引っ込めてしまったのだが、その事がずっと引っかかっていた。

結局、私はレポートに書かれている文章だけに注目していたのかもしれない。学習者に「(対話の相手に) 何を聞いてみたいの?」と問いかけることによって、まだ文章化されていない、その人を選んだ確かな理由、もっと具体的なエピソードを聞くことができたのかもしれない。この時期、学習者はそれぞれが選んだ相手との対話を終えて「対話」の執筆に入っていた。今になって対話相手を選んだ理由を聞くのは遅すぎるだろうと思った。それでも聞いてみたいという気持ちが強く、Mさんとの対話の翌週、私はグループの学習者に「どうしてこの人を対話の相手に選んだの?」「対話をして何を知りたかったの?」と問いかけた。学習者はみな率直に答えてくれたが、対話をする時点で、自分たちの知りたいことがそれほど固まっていなかったこともわかった。その時「やっぱりもっと問いかけるべきだったんだ!」と体験的に学んだ。レポートに書いてあることは、書き手の考えていることの一部分でしかない。だから、そこに書いてあることだけではなく、読んでわかりにくい部分だけでなく、基本的に「今、どんなことを考えているの?」という立場に立って、実習生は問いかけるべきなのである。

人は様々な対話を試みる。ここでいう対話とは、誰かと話すこと、相談すること、仲間と話し合うこと、自分自身に問いかけること、そして、本を読みながら考えること、すべてが対話である。効果的な対話をすることによって自分の考えを客観的にみつめ直すことができ、その結果、自分の答えがはっきり見えてきたり、新しい答えがみつかったりする。私は、Mさんとの「対話」を通して、自分が抱えていた「もやもや」を解消するという体験をした。もちろん、対話は日常的に行われている行為である。しかし、テーマ設定に始まり、自分が選んだ相手と真剣に対話をして、その対話の内容を何度も聞き返しながら文字化し、結論を導き出すというプロセスの中で、これほど対話というものを意識したのは、初めての体験であった。この体験をする場所が「総合」クラスの活動である。

私はMさんとの対話を通して「対話とは何か」「対話をするこの意味」について考える機会を得た。対話が始まる直前まで、私は「総合」クラスの学習者にどう問いかければいいのか、どのような対話を目指すべきなのかをMさんに教えてほしいという気持ちが強かったように思う。しかし、Mさんは聴き手としての立場を貫き、私の話を聴き、問いかけ、ふたたび聴くということを繰り返した。

「総合」クラスの中で、実習生は相手の考えていることを引き出すために、学習者に常に「問いかける」という姿勢が必要とされる。「問いかける」ことをためらっ

た時期もあったが、改めて「問いかける」ことの重要性を認識した。「問いかける」にはいろいろな形がある。「どうしてこう思ったんですか?」というのは明示的な問いかけの一つの形に過ぎない。相手の話を聞いて、要点をまとめて確認することも、相手が話すのを待つことも「問いかける」ことなのである。もちろん相手に問いをぶつけることも必要だが、「相手の話を聴く」ということが、実習生としてのもっとも基本的な姿勢だと考える。

私にとって総合活動型日本語教育とは、対話を通して問題意識をはっきりさせていく場である。「動機」を書いた時は、自分の言いたいことをみつけることだと考えていた。しかし、「総合」クラスにおいて重要なのは、相手に自分の言いたいことを伝えたいという話し手と、相手の話を聴きたいという聴き手が存在することである。流暢に日本語を話すことが目的ではなく、自分の考えていることを相手に伝えるために対話があり、聴き手は、相手の考えていることを引き出す役割を担っているのである。

## 5. おわりに

「総合」クラスは、目に見えない様々な仕掛けが用意してある。学習者は、日本語を使うしかないような環境におかれながら、自分の問題を解決していくのである。それは、週1日の授業時間だけではなく、「総合」を受講する15週間もの間、絶えず自分のテーマと向き合い、言いたいことを伝えるべく日本語の表現と格闘し、レポートを仕上げていく。その上、同じグループの人たちの書いたレポートを読み、コメントもしなければならない。しかも、「総合」というコミュニティには、支援者はいるものの、答えを与えてくれる人はいないのである。私は実習生（支援者）という立場で「総合」に参加してきたが、週1日の授業なのに「ここまでやるんだ!」という驚きは今も消えていない。本当に強い目的意識のある学習者しか最後まで残れない活動だと思う。だから、この活動には、学習者を励まし支援する者が必要である。実習生は支援者としての役割を担っているのである。支援する者として、相手の考えていることを引き出すために、こちらから問いかけていく必要がある。

この実践研究レポートを書いている時、自らの問い「どのように問いかけるべきなのか?」の答えがみつきりそうだと思った。実際いくつかのヒントはみつかったと思う。その一方で、私自身がそうであったように、学習者の「教えてほしい」という欲求も理解できる。だから、支援する側は、相手の言葉を何でも受け止める「聴き手」の役割を見せることが必要だろう。また、そこには相手の言葉を何でも

受け止める「場」が必要となるだろう。しかし、受け止める場を作るためには、「話しやすい雰囲気」が必要となるのではないだろうか。「総合」に参加して感じてきたことは、「総合」には余計な活動がないということである。ウォーミングアップをせずに、いきなり走り始めるイメージがある。しかし、レポートについて「どうしてこう思うんですか？」と問いかける前に、相手のことを知ることが先であり、問いかける前に、支援者は何でも受け入れるという姿勢を見せるべきではないだろうか。それでこそ、安心して「話し合う」「意見交換する」「ディスカッションする」ことができるのではないだろうか。実践(9)を終え、私はこのような新たな問いを持つようになった。

私は、基本的には「総合」の理念と方法論を支持していきたいと考えている。日本語教師として学習者の言いたいことに耳を傾け、問いかけ、相手の考えていることを引き出していくように心がけたいと思う。今後は、私の総合活動型日本語教育を目指して、「話しやすい雰囲気をどのように作っていくか」という新たな課題と向き合っていきたい。